NIE

年　組　名前

道新でワークシート

# 地下鉄乗降口にスロープ

## 市、来年度から 車いす利用者向けに

札幌市は来年度から、市営地下鉄の車両とホームの間にある隙間と段差を解消するため、一部ゴム製のスロープの設置を進める。車いす利用者が地下鉄に乗り降りしやすくするのが狙い。東豊線の栄町駅など4駅で試行的に設けた後、南北と東西両線を含めた全駅への早期実現を目指す。

### 栄町など4駅先行設置

導入するスロープは跳び箱の踏み切り台に似た形状。車両に近づける部分はゴム製で、仮に車両に触れても車両が傷つかないようにしてある。同様のスロープは東京や名古屋の地下鉄でも使われている。

第1弾として市は来年度、駅ホームが直線となっている東豊線の栄町と新道東、元町、環状通東の4駅にそれぞれ8カ所ずつ設ける。車内の車いすスペースに近い乗降口に置く予定。本年度中に実施設計を終える見通し。将来的には東豊線各駅に8カ所ずつ、南北と東西両線の各駅に4カ所ずつの計254カ所に設ける方針だ。

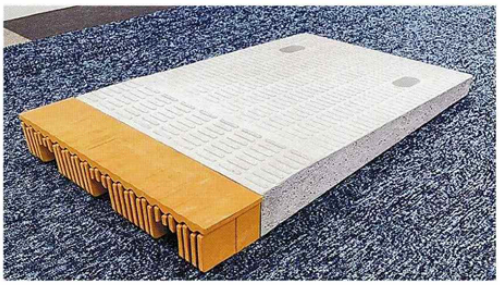
市交通局によると、現在の隙間は最大15センチ、段差は14センチの駅もある。東京五輪・パラリンピックを機会に、国が2019年に改定した「バリアフリー整備ガイドライン」によると、目安値は隙間「7センチ以下」、段差「3センチ以内」。札幌市営地下鉄で、いずれかを満たしている乗降口はない。

札幌ではゴムタイヤを採用しており、鉄輪に比べて車体の揺れが大きい。そのため車体とホームの隙間や段差を大きく設ける必要があったという。現在、車いすで乗降する際、駅係員がホームと列車の間にスロープ板をかけて介助している。市によると、介助した件数は利用者の多い大通駅で、22年度に1日平均51件あったという。

市交通局は「先行設置する4駅で工期や工事費を見極めて、早く全駅に入れたい」としている。先行する4駅に続き、利用者の多い大通駅などから順次、整備を検討する。設置工事の終了後も、市は駅係員による介助を続ける予定。

（久保耕平）

9月の車いす街歩きイベントで、駅係員らの介助を受けて地下鉄に乗る車いす利用者（中村祐子撮影）



導入しようとしているものと同じ一部ゴム製のスロープ（札幌市提供）

2023年9月27日（水）朝刊　札幌市内版　16ページ（記事は再編集しています）

① 今回のスロープはどのような目的で設置されたか、記事を参考に書きなさい。

② 札幌市の地下鉄で、車両とホームの隙間が大きくなっている理由を、記事を参考に書きなさい。